相模経済新聞　2020年4月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

23

東京五輪・パラリンピックを再考する

「ヒトを殺すにゃ、刃物はいらぬ、バケツ一杯の水で良い」という物騒な都々逸がある。水中に頭を押し込めば、ヒトは10分で絶命する。ヒトは空気を遮断されると即、死に至る。肺炎は高齢者の死亡原因上位の病の一つである。

宇宙から地球を眺めると、人類は、今まさに新しいタイプの戦争の最中にある。中国・武漢で始まった新型肺炎（コロナウイルス感染症：COVID−19）の流行の中心が、ヨーロッパへ、そしてアメリカ合衆国へと移り、さらに医療体制が整っていない開発途上国へと拡散している。人口の多いインド、アフリカ、南アメリカ大陸、東南アジアでの感染爆発が心配される。今夏に予定されていた東京五輪・パラリンピックは、1年先に延期され、関係者はホッとしているが、果たしてそれで良いのだろうか。

宇宙生命哲学的視点で考えると、生命は、長い年月をかけてウイルスとの共生で進化を遂げてきた。

一般に、ウイルスは他の生物の細胞の中で増殖すると、その細胞を壊して周囲の細胞に次々と感染する。今回のコロナウイルスは、人から人へ感染し、あっという間に地球全域に拡散した。人類は、このウイルスと長い年月をかけて、共生関係を結ぶことになる。

世界のCOVID-19感染者数 Google Coronavirus map 2020.4.2

COVID−19では感染者の8割程度は軽症だが、一気に重症化する患者が増えると医療崩壊が起こる。感染者が感染を自覚しないまま病原ウイルスをばら撒き、特に高齢者が犠牲になる図は、行き過ぎた少子高齢化社会をこのウイルスがバランス調節しているようにも見て取れる。地球上の長い生命の歴史の中で、ウイルスが行き過ぎた種の増殖を調節した例は数多く知られている。生命現象の奥は、限りなく広く深い。人類は、ウイルスが仕掛けた戦略を決して甘く見てはならない。世界の多くの指導者が、今は戦時下で非常事態であることを宣言して、国民からの協力を要請している。医学の粋を集めても、ワクチンや特効薬の開発には相当の時間を要する。1年後に、世界のトップアスリートや観客が、安心して世界中から東京に集まれる環境を整備することは容易でない。

私は、3・11の福一原発事故以来、「地球環境核戦争」という言葉で現状を世の中に伝えてきた。現在の我々は、原発事故とCOVID−19という二重の戦禍の真っ只中にいて、五輪どころではないように思える。次回は、福一原発のトリチウム汚染水の処理について提言する。